

# 黒人研究の会会報

*Japan Black Studies Association Newsletter No.68 (December 13, 2008)*

第68号 2008年12月13日

## 例会発表要旨

特別例会 2008年6月21日 キャンパスプラザ京都

キャロル・フィリップスを囲んで (Conversations with Caryl Phillips)

この特別例会は、カリブ海のセント・キッツから生後まもなくイギリスに移住し、イングラ  
ンドのリーズで育ち、オックスフォード大学で学んだ黒人作家キャロル・フィリップス (Caryl  
Phillips) 氏を囲む会として企画された。現在、フィリップス氏は米国イエール大学英文科  
の教授でもある。今回の来日は、『キャロル・フィリップスの世界——ブラック・ブリティシュ  
文学の現在』(世界思想社、2008年)を刊行した加藤恒彦会員の招きによるものであつ  
た。

本例会はフィリップス氏の希望もありマスコミ等には宣伝せず、作家を含め10数人とい  
う少人数の集まりとなった。例会ではまず、フィリップス氏と親しいイギリス黒人活動家でも  
ある、詩人・歌手のLinton Kwesi Johnsonを取り上げた映像Dread Beat An' Blood を  
20分ほど鑑賞した。そして加藤会員のコメントの後、フィリップス氏によるその映像や自身  
の作品に関するスピーチとなった。そして、フィリップス作品の論考もある朴珣英会員が、

用意したコメントといくつかの質問を投げかけた。その後、自由な形での質疑応答となった。

本例会は、フィリップス氏にとっては日本での講演や会合の最後であり、かなり疲労もあったようである。しかし、例会後も食事会やすし屋での二次会まで、日本酒の杯を傾け続けながら私たちにつきあってくれた。刺激的な時間と空間そして話題を与えてくれたフィリップス氏と、作家の来日や例会開催に労をとって頂いた加藤会員に感謝したい。

(文責・古川 哲史)

7月例会 2008年7月12日 神戸市外国語大学

報告:アメリカ黒人の宗教体験に関する研究について—ミニシンポジウム開催に向けて

山下 弥生

アメリカ黒人の宗教体験は彼らの文化やアイデンティティの形成に大きな影響を与えた。このことは一般に理解されているが、文化・文学の分野においては黒人の宗教および宗教体験を重視した分析や研究はまだ未開拓である。たとえば、語り継がれた黒人の宗教体験を記録したテキスト類は各分野でたびたび紹介され引用されているにもかかわらず、それらを収めた書物の多くは「コレクション」にとどまっている。元来、アメリカ黒人と宗教に関する研究は主に社会学、宗教学、人類学、歴史学といった分野でそれぞれに研究されてきた。黒人の宗教体験をより広範に理解し研究を深めるためには異分野の研究者たちと交流し学際的に研究をすすめることが重要である。このことを再認識し、宗教学者を招きシンポジウムを開催することを提案した。

10月例会 2008年10月25日 大阪工業大学

トニ・モリソン文学における脱構築理論の可能性

時里 祐子

トニ・モリソンの作品において、最も特徴とされるのは、やはり作品の持つ意味の多重性や、オープン・エンディング、マジック・リアリズムといった「曖昧性」とでも言うべき点ではないだろうか。これらの点を脱構築的と指摘する研究は多くあるが、本発表ではそのようなモリソンの脱構築的手法が、何を目的とし、もしくは何を避けようとしているものなのか、という点に注目し、とくにBeloved、Paradise、Loveで描き出されている記憶とトラウマという主題を考察した。

そもそも奴隷制度に端を発するアフリカン・アメリカンの歴史において、トラウマ記憶という言葉は宿命的に響く。しかし、トラウマ記憶という病理を伴う現象や民族の記憶の問題を掘り下げる研究が行われるよりも前に、奴隷制度という歴史はアメリカのトラウマ的歴史としてすでに刻まれ、公民権を得るという社会的運動を通して、いわば過去として一つのかたちに措定されてしまい、「病理的トラウマ」の問題よりも、希望的未来をどのように表象するかには黒人文学は傾斜していった感がある。また、アフリカン・アメリカンの民族的トラウマは、不可避免的に肌の色と結び付けて捉えられてきたが、その問題が背景に後退させられているモリソンの後期作品群においては、主題は個々のキャラクターのトラウマ的記憶に据えられており、モリソンの視点は人間の「記憶」、「トラウマ」のありようや対峙の仕方に移動しているように思われる。本発表では、ユダヤ民族のホロコーストに関するCathy Caruthらの脱構築的トラウマ研究と比較しながら、トラウマ記憶を描写するモリソンの手法が、ジャック・デリダが言語と意識を捕らえた認識といかに共通するものであるかを考察した。

11月例会 2008年11月22日 キャンパスプラザ京都

The Waning of the "Mandela Syndrome"? State and Identity in Contemporary South Africa

Scarlett Cornelissen (Stellenbosch University, South Africa)

On the eve of South Africa's transition to democracy many commentators noted that only if a full-scale transformation of the South African society and polis were to occur, would racial bloodshed - widely anticipated as the logical outcome to the end of the apartheid state - be averted. Nelson Mandela, the first black State President of South Africa and then leader of the African National Congress, made the realisation of the 'Rainbow Nation' and the creation of a non-racial, unified society the focus of his reign. Racial/national reconciliation came to be the mainstay of his presidency, embodied in processes such as the Truth and

Reconciliation Commission, and the drafting of a compromise Constitution. The 'Mandela Syndrome,' focused as it was on racial reconciliation, has mixed legacies in current-day South Africa. Early post-apartheid signs of rifts within the African National Congress (ANC) and its alliance partners, and within the party itself have by 2008 culminated in the ousting of Thabo Mbeki, Mandela's successor as State President, and the splintering of the governing party. While a wave of populism seems set to determine the political futures of the ANC and of South Africa at large, it is today highly questionable whether Mandela had succeeded in his ambition of a racially unified society.

## 会員からの投稿

### ウガンダの女性出版社インタビュー

大池 真知子

以下のインタビューは、ウガンダの女性出版を推進するNGO、フェムライト(Femrite)の活動について、フェムライトのプログラム・コーディネーターであるヒルダ・トゥウオンジェイルウェ(Hilda Twongyeirwe)さんに話を伺ったものである。インタビューは2008年8月25日にフェムライトの事務所にて、数時間かけて行われた。

大池: 今日はお時間をとっていただきありがとうございます。まず、どうして私がフェムライトを訪ねようと思ったのかを説明したいと思います。数年前私は、フェムライトが出版した本を何冊か読みました。『海をわたる衝撃の波』や『ある母の回想』や『カッサンドラ』などです。いい作品だとは思いましたが、正直、すばらしいとまではいかなかった。でもそのあと、『熱帯魚』や『待つ』を読んで感銘を受けました。両作品はフェムライトが出したのではありませんが、作家はフェムライトの会員です。また、『アフリカの恋愛譚』というアフリカ女性作家短編集を読んだとき、気に入った作品のほとんどがウガンダの作家だった。そこで思ったんです。「いったい何がどうなっているのか、じっさいに行ってみよう」とね。(i)

このインタビューは日本語に訳して、私が所属する日本の学会で発表するつもりです。アフリカの地元の出版社がすばらしい仕事をしていることに、みな興味をもつと思います。読

者のために、まずフェムライトの歴史を簡単に説明し、フェムライトの成功の秘訣について教えてください。(ii)

ヒルダ: フェムライト(ウガンダ女性作家協会)は1995年に動き出しました。正式に発足したのは1996年5月3日ですが。最初の会員はほんの一握りで、8人か10人ぐらいでしたが、最終的にはもっと大きくなりました。私自身、創設に加わったことを光栄に思っています。当時マケレレ大学の講師だったマリー・カロロ・オクルト氏が、中心になりました。ウガンダでの女性出版を強化すべく、私たちは結集したのです。そのころ、男に比べると女の出版作家はきわめて少数で、出版の機会が必要でした。1997年までにフェムライトは4冊ほど出版することができ、出だしは上々でした。そのうちに私たちは、継続的に助言しあえるような機会の必要性を感じるようになり、2001年か2002年ごろ、フェムライトで「読者作家クラブ」を始めました。(iii)今でも毎週月曜日に、フェムライトの事務所でクラブの会合が開かれています。クラブを始めたときは月に一度でしたが、もっと頻繁に会う必要を感じ、毎週にしました。現在、クラブはとても活発になり、男も女もクラブの会員になっています。

私たちの成功については、秘訣はトレーニングにあると思います。フェムライトは30人ほどの作家の作品を刊行しています。フェムライトでトレーニングや助言を受けた会員の多くが、フェムライトや他社での出版にこぎつけています。彼女らがフェムライトから第1作を出しても、全部が全部ベストセラーとはいかないかもしれません。けれども作家たちは、それで国際的な文学の舞台に登ることができ、経験を積むにつれ執筆の技術も向上しています。このことが最大の成功だと思います。じっさい会員には、著名な文学賞を受賞した者もいます。コモンウェルス最優秀デビュー作賞および短編賞、マクミラン・アフリカ作家賞、アフリカ文学ケイン賞、女性世界作家賞[いずれもアフリカ文学界でよく知られる賞]、ウガンダ書籍トラスト[東アフリカ書籍開発協会のもと同トラストが与える賞]、キナラ砂糖作品賞[ウガンダの砂糖製造私企業が与える賞]などです。フェムライトは大きな成果を挙げていると思います。

大池: なぜ他のアフリカの国々にとっては、それが非常に難しいのでしょうか。

ヒルダ: 女性作家協会が結成されている国は他にもありますよ。ジンバブエ女性作家とか、タンザニアのUWAVITA作家協会の女性支部とか。ザンビアにも女性作家のグループがあるし、南アフリカでは、正式な女性作家協会ではないけれど、女性作家が集まってフェスティバルをしたり、文学のイベントをしたりしています。ガーナではアマ・アタ・エドゥ教授がムバセム(MBASEM)という女性作家協会を発足させました。

大池: ええ、そうですが、うまく行っているのでしょうか。

ヒルダ: うまく行っているかどうかはわかりません。協会があることは確かです。思うに、問題は資金でしょう。フェムライトでも、いまは基礎的な活動費を援助してくれるスポンサーはいません。過去11年間は、HIVOSというオランダの開発機関に、活動の基礎となる資金

を出してもらうことができ、フェムライトは恵まれていました。現在フェムライトは、プロジェクトごとに複数スポンサーから援助を受けていますが、基礎的な活動費は援助してもらっていません。芸術と文化に資金を提供する多くの開発機関は、たとえばある出版物の資金提供、あるトレーニング・ワークショップの開催費提供、あるイベントの旅費提供はしても、基礎的な活動費は提供しません。でもいま挙げたような諸活動を円滑に進めるには、事務所費、人件費、通信費、事務費が必要です。しかしほとんどのスポンサーは、こういった基礎的な活動費に注意を払わないのです。これらの基礎が成功の鍵を握っているのに。基礎的な活動費が十分ないと、ある意味、地に足の着いた仕事できません！宙に投げ出されたようなものです。先に挙げた女性作家協会は、こういった問題に悩んでいるんだと思います。

HIVOSはフェムライトの成功に非常に大きな役割を果たしたと思います。もしHIVOSが基礎的な援助をしていていなかったら、私たちは他の女性作家協会と同じで、存在はしていても、今のような大成功を成し遂げることはできなかったでしょう。組織にきちんと事務所があり、スタッフがいて、事務費がカバーされてはじめて、やろうとしていることが達成できるというものです。これらがなければ不可能です。

2005年にHIVOSがワークショップを開催し、タンザニア、ケニア、ウガンダ、ジンバブエの作家が出席しました。女性作家が中心でしたが、男性作家も数人参加しました。そのワークショップのあと、私は個人的に、やや失望しました。地域横断的な女性作家協会ができることを期待していたからです。でもそうはならなかった。

最近、フェムライトはジンバブエ女性作家協会の2人と会合を持ち、地域横断的な女性作家協会を作れないか話しました。フェムライトがこれを提案し、彼女らも賛同してくれました。彼女らは、まずフェムライトに可能性を探ってほしいと言い、フェムライトの発案なので、ウガンダが最初の橋渡しをすべきだという点で、私たちは一致しました。これは女性作家協会ネットワークとも呼べるものです。というわけで、私たちはそれが実行可能かどうか、努力しているところです。私は可能だと思います。これまでいくつかのスポンサーに話をしましたが、賛同してくれたところもありますから。資金を得るところまではいいませんが、始めれば援助が得られるかもしれません。まずはコモンウェルス基金とアフリカリアが、地域女性作家合宿を運営する資金を提供してくれました。これは、女性作家が執筆目的で同一ホテルに1週間滞在し、執筆にあたってはファシリテーターから相談や助言が得られるというものです。アフリカではじめての試みで、わくわくします。将来は、おそらく1ヶ月か2ヶ月のあいだ運営できればいいと思います。この試みで、地域協会の実現に希望が持てますし、地域協会ができれば、私たちは協力し合って橋渡しをし、継続的な活動ができるでしょう。

大池:確認したいのですが、資金は出版ごと、ワークショップごとに提供されるのですか。いわゆる「バスケット資金」、つまり、スポンサーが一定の資金を提供して、フェムライトがその用途を決めるという方式のものはないのでしょうか。

ヒルダ:現在のやり方は、申請してはじめて活動資金が得られるというものです。スポンサーは申請内容をすべて承認して予算を出すかもしれないし、一部の内容を選んで資金提供するかもしれない。たとえば「人件費は出ませんが、出版費は出しましょう」とね。出版物を刊行するのにかかる資金を提供しさえすれば、出版のためにだれがどう働いていようと知ったことではないわけです。資金はプロジェクトごとに提供されるので、私たちの組織としての業績に悪影響を及ぼしています。非常にストレスがたまります。そういう資金だと、仕事に集中できません。「この資金を受け取るべきか。いっそ受け取らないほうがいいのではないか」と思うこともあります。それほどまでに追い詰められますよ。なぜって、資金の額がどれほど小さかろうが、やるべきことは、大きなプロジェクトをする場合と同様だからです。つまり、報告書を書いて、説明責任を果たして、プロジェクトを実行して、調節をして……とてもストレスを感じます。でも全体を援助してもらえば、効果的かつ能率的に仕事ができます。

HIVOSとの契約は残念ながら終了しましたが、私に言わせると、HIVOSは開発機関の理想を代表しています。彼らは、調理のされていないメニューを食べさせろとは言いません。全体を援助してくれるのです。フェムライトにかんしては、5人分のスタッフの人件費、事務費、それにプロジェクトの費用を出してくれました。これならやるべきことができますよ。私たちのような芸術文化部門の組織にどうしろと言うのでしょうか。私たちはどこも資金難です。「良い統治」とか「民主化」とかの類のプロジェクトに資金が行っているのです。

#### ・文芸文化と出版社について

大池:フェムライトの最近の作品——紛争を扱った『今日あなたもわかるでしょう』やHIVを扱った『あえて言うわ』——についてですが、これらは純粋な創作作品というよりはプロジェクト的なものですね。(iv)フェムライトの活動がこういった作品に傾いているのは、資金が得やすいからでしょうか。

ヒルダ:違います。資金が理由なのではありません。創設時のフェムライトは、創作文学のことをおもに考えていました。しかし次第に、創作ではなくとも、やはり語られ、聞かれねばならない物語があることがわかったのです。そこで私たちは、創作的なノンフィクション——テーマ・ライティングと私たちは呼びましたが——の分野に乗り出しました。この活動は女たち、とくに周縁化された女たちが告白した人生を、ありのままに記録するものです。私たちに必要なのは、女たちにかかわる問題について語る女たち自身の声です。生の声をつづじて、人々は彼女らについて聞き、何が起きているのかわかるようになる。おそらくそうな

れば、フェムライトの尽力で良い変化が起き、女がみずからの能力をしっかりと発揮できるようになることでしょう。そうなればかならず、よりよい社会が生まれるでしょう。

大池: こういった活動は成功しているんですよね。今後は伝統的な小説よりも、創作的ノンフィクションに焦点を置くつもりですか。

ヒルダ: いいえ、両方を続けます。フェムライトは会員制なので、多くの会員がいて、ノンフィクションがやりたくて入る人もいれば、創作文学がやりたくて入る人もいます。売れ行きはどのジャンルもたいして変わりませんが、長編小説よりは短編集や創作的ノンフィクションの方が売れます。国内でも国外でも。

創作的ノンフィクションは大いに成功しています。多くの人に読まれ、最近は大学の文学やジェンダー学の授業で使われたりしています。それに、次のプロジェクトの資金も得ています。「女性性器切除(FGM)について語る女の声」というプロジェクトです。切除を逃れた人たち、切除を受けた人たち、文化に抵抗した人たちの体験談が得られるでしょう。FGMには多くの態度があります。FGMの文化は、ウガンダではおもに2つの地域に存在しています。それぞれの地域から合計20話収集し、そこから10話を選んで出版するつもりです。ふつうは15話のなかから選ぶんですけどね。執筆がこのあとすぐに始まりますから、12月には各地域から体験談の原稿が上がってくるでしょう。

大池: 日本の読者も読みたいでしょうね。

ウガンダの出版事情に詳しくないのですが、モニター、ファウンテン、さらに東アフリカ教育出版社も含め、これら地元出版社にくらべて、フェムライトはどうなのでしょう。よく知られているのでしょうか。フェムライトが出版した本を何度も買うような読者を獲得していますか。地元の出版事情におけるフェムライトの位置を教えてください。

ヒルダ: そうですね、本を出すたびに買ってくれる読者はいますよ。あなたみたいにね。でもそういった読者はまだ少ないです。もっとそういう読者が必要ですね。

フェムライトは国内外でよく知られています。売り上げはそれほど多くありませんが、それは知られていないからではなく、読書文化が育っていないからです。とくに創作文学の面ではうかがえますね。人々は読書に興味がないんです。そう、相対的にはフェムライトはよく知られています。売上は他の出版社ほどないけれど。ウガンダで本を買う人は、おもに教育目的の本を購入しますから。ウガンダの出版社の大半は、教育出版に力を入れています。教科書売っているわけですが、でもフェムライトはその分野は手を出していません。そこに参入するつもりはありません。今いるところにとどまります。それが私たちの存在理由——国の文学伝統に貢献すること——だからです。

大池: それを聞いて安心しました。今おっしゃった出版社は、教科書以外に創作文学も出版しているんですよね。



ヒルダ: ええ、でも1年か2年に1冊といったところで、たんに社会責任を果たすためといった感じですね。もちろん、教育出版では多くの資金が動いています。彼らは教科書出版に忙しくて、フィクションには時間を割いていません。フィクションをやるとしたら、最近あるのは小学校の副読本ですね。たとえばエイズにかんする副読本といったものですが、これらは教科書に近く、やはり学校で読まれるわけですね。ウガンダの読者市場は、おもに学校にあります。まあ、彼らはフィクションを出すというような冒険をして、金が滞ってしまうのが嫌なんですよ。

ですからフェムライトは、フィクションの出版にかんしては、彼らよりもうまくやっているといえますね。

大池: 地元の言語で出版する計画はありますか。

ヒルダ: そのような計画もありました。とくに周縁化された女たちの体験談にかんしてね。英語を読めないような女でも、地元の言語で書かれていれば、それらの体験談を読めるでしょうから。でもやはり最大の壁は、こちらの受け入れ能力です。スタッフがまったく足りません。じっさい、地元の言語で収集される体験談もあるのですが、地元の言語できちんとした本にするには、表記、編集、校正など、制作の面でやることは増えます。

大池: 資金の話に戻りますが、本の売り上げは収入の何パーセントを占めるんですか。

ヒルダ: 3パーセントぐらいです。

大池: たった3パーセントですか！売り上げを伸ばしたいとのことですが、何ができると思いますか。

ヒルダ: そうですね、もし可能なら・・・ほかの国は知りませんが、少なくともウガンダでは、ほとんどの読書は学校で行われます。財政状況を変えるためには、フェムライトの本が課題図書や副読本として、学校で読まれるようになればいいですね。先に言ったように、教科書はやりませんがね。

政府が文学を支援することは可能ですし、必要だと思います。政府は創作文学を支援すべきだし、それは独創的な思考の手助けになるはずですね。文学は国家の記憶だといえます。ウガンダの本と文学は教育システムに組み込まれるべきです。子どもたちが文学の伝統とともに育つことができるように。創作文学は無からは生まれません。人々の経験から生まれるのです。ですから政府は、子どもたちが本を読むことで豊かな文学経験を得られるよう支援すべきです。

大池: 国際的な市場はどうでしょう。拡大しようと思いませんか。

ヒルダ: アフリカン・ブックス・コレクティブがフェムライトの本を販売してくれています。かつては多くの売り上げがありました。去年ぐらいからか、彼らも資金がなくなり、以前ほど活発でなくなりました。今は、注文が入った分だけコレクティブが印刷するという方式です。いい点もありますが、一冊しか買わない人にとってはとくに本が高くなりかね。

それ以外の販売方法としては、本を買いたい人がフェムライトに直接連絡することもあります。フェムライトのウェブサイトの本を載せていますが、たとえばクレジットカードの販売は取り扱っていません。でもウェブ上で売るには、やらなければいけないことです。市場を拡大するために多くのスキルが必要です。

大池: 私が最初に言った『熱帯魚』や『待つ』は、フェムライトが出版してもいいのと思うんですが。

ヒルダ: 先ほど言ったように、作家は第1作をフェムライトで出しても、そのあと他社に行くのです。フェムライトは、文学を書くトレーニングの場であると同時に、他社による出版機会を得る場でもあるからです。会員が技術を磨いて知識を得た時には、よりよい機会、より大きな出版社を求めていくのです。

大池: 積極的差別是正措置

アファーマティブアクション

がもたらす烙印

スティグマ

のようなものはあると思いますか。つまり、フェムライトから出たのは、いい作品だったからでなく女だったからだ、というような。

ヒルダ: そういうことを言う人もいます。でも会員が獲得した文学賞が、フェムライトの盾となります。ある作家が女だから出版できたというのなら、彼女がフェムライトではなく他で賞を得ているのはどういうことでしょうか。

大池: ということは、先ほどの作家は、マーケティングの理由から他社を選んでいるということですね。出版を待っている原稿は、手元にたくさんあるのでしょうか。

ヒルダ: いまですか。資金があって、出版しようということになったら、原稿を募集します。いまはまだ募集はしていません。お金がないのに人に希望を与えてしまいますから。出版のためではなく、個人的に読んでほしいということで、いくつか原稿が持ち込まれることはあります。ああ、でも、紛争下の体験談の原稿はありますよ。[今後これらをまとめて出版する予定ですが、それらの体験談は、すでに出したCD版の]『今日あなたもわかるでしょう』に収録された体験談とは違うものとなるでしょう。

・聞かれるべき物語

大池: それでは最近の出版物である『あえて言うわ』[HIV／エイズについての体験談]についてうかがいます。みずからのHIV感染について声をあげて語ろうという人を見つけるのは、難しくありませんでしたか。物語には内密な内容が含まれますよね。

ヒルダ: こちらがインタビューしたいと思う人を訪ねても、話してもらえない。でもこちらは、それは語られるべき物語だと思う。そこでいったん家に帰って、翌日また行く。そう、何度も

何度も繰り返し、「この人なら打ち明けられる」と思ってもらえるまで、努力するのです。なかには進んで打ち明けてくれる人もいます。自分の物語を人に伝える機会を探しているようなケースですね。でも人によっては、かなりの時間がかかることもあります。簡単だったということはありません。また、話をしたあとで考えなおして、「出版しないでください」と言われることもあり、そうするとまた、他の体験談を探すわけです。

ふつう書き手は、2つか3つ体験談を収集して、そのうち一番いいものを選ぶようになっています。『あえて言うわ』の場合、書き手はもともと8人いましたが、途中で辞めた人もいました。原稿を持ってきても、あまり良くなって本には入らないと言われて、それで辞めてしまう。結局20話近くの体験談を収集し、それを7話に絞り、質が劣るということで2話落として、最終的に5話になりました。

大池: 話し手はどうやって見つけたのですか。

ヒルダ: まず物語を収集する地域を決めます。北部だとか、中部だとか。そして、その地域で活動している草の根の団体を探します。話し手を決定するのに、『あえて言うわ』はTASO(ウガンダのエイズ援助組織)、『希望の涙』はFIDA Uganda(ウガンダ女性弁護士協会)の法律援助相談所、『今日あなたもわかるでしょう』はOCHA(人道援助協力国連事務所)および地方議会と協力しました。(v)こういった団体とコンタクトを取って、物語を持つ女性たちのいる所へたどりついたわけです。

大池: 語り手と書き手はどう組み合わせるのですか。また、書き手には何かトレーニングを施すのでしょうか。

ヒルダ: 『あえて言うわ』の場合、西部から物語がほしかったので、西部の言語を話せる書き手を選びました。中部も同じで、中部の言語を話せる書き手です。普通はそういうふう組み合わせます。語り手が若い時は、若い書き手を選ぶこともあります。

書き手はフィールドに出る前に、トレーニング・ワークショップを受け、インタビューの仕方、相手と関係を作って物語を聴き取る方法について学びます。フィールドで必要なのは書き手の声ではなく、語り手であるもうひとりの女の声だということが、明確にされます。インタビューの仕方、物語の書き方、物語から自分の感情を分離する方法などなど、こういったトレーニングを経て、書き手はフィールドに赴きます。地域によっては、専門家の助けを借りて、その地域にかんする背景的な知識を覚えてもらうこともあります。このような専門家は、準備段階のワークショップでファシリテーターの1人となります。

大池: 語り手には何か報酬を支払ったのでしょうか。

ヒルダ: いいえ。物語を買いたくありませんから。ただし、うまくいくようにはします。交通費を支給したり、携帯電話の通話料を払ったり。そうすることで、物語を買いはしないけれど、物語を語りやすくするわけです。

大池:現金は支払わないわけですね。ではそういった細かな利益以外に、どのような利益を語り手は得たのでしょうか。

ヒルダ:それはとても良い質問ですね。私たちが悩んでいるのもその点についてなんです。語り手に利益はありません。ただし・・・私たちが彼女らの物語を集めると、その物語が国内外に、言うなれば注意を喚起することになる。ときに彼女らは・・・そう、最初にやった『希望の涙』のように、本の出版イベントで、人々がある少女に寄付をしました。[その子の話は『希望の涙』で語られているのですが、]彼女は家族の財産をおじに全部盗まれて、きょうだいもろとも1文無しになっていたんです。でも寄付のおかげで、少女は学校に戻ることができました。フェムライトとしてはなにも報酬を出しません。書き手の方は支払いを受けますが、何か支払うべきだとも考えているものの、物語を買わないという点はやはり重要です。ただ、フェムライトは本を売って、お金を得ています。この売上金は事務費やほかの女の物語を出版するのに使われ、個人の懐には入りませんがね。ですからそれは、今も私たちが悩ませている問題なのです。

大池:出版は、彼女らのエンパワーメントにつながるとは思いますか。

ヒルダ:ええ、思います。なぜって『希望の涙』の場合ですが——私は何度もこの本について言及していますが、それはこの種のプロジェクトとしては最初のもので、しかも私は光栄にも書き手の一人だったからです——女たちは前進しました。彼女らの物語が出版されたあと、彼女らは「そう、いまや皆がこのことを知っている」と言い、安心感を得られました。というのは、多くの人を知るようになって、彼女らを苦しめていた者は「まずい」と思ったからです。『あえて言うわ』の場合、書き手は話した後、解放されたように感じました。ときにフェムライトに連絡してきて、その後どんなふうに進みを進めているか教えてください。そう、物語を語ることはエンパワーメントにつながるのです。

大池:FGMIについても同じようなプロジェクトをすることですが、どうしてそのことを思いついたのでしょうか。

ヒルダ:私たちの頭にあるのは、女にかかわることで、議論を呼びそうな領域はどこか、ということだけです。女に影響を与える独特の状況を探しているわけです。女を周縁化しつつづけている領域があり、私たちは女性作家として、これらの到達しがたい領域を露わにすべきだと感じるのです。じつはフェムライトの戦略的な計画として、次の3つの領域での語られない物語を考えています。FGM、レイプと性暴力、監獄の経験です。また別のプロジェクトとしては、少女を元気づけるような物語を記録するというものもあります。監獄の経験では、死刑囚の物語が良いと思っています。もしもその物語を集められれば、語るべき物語となるでしょう。

大池:FGMIについてはどう思いますか。地元の読者のサポートを得られるのでしょうか。

ヒルダ:FGMについては、個人的には、非常に非人道的な儀式だと思います。正直言って、深刻な人権侵害に数えられますよ。

地元のサポートは得られるはずですが、FGMについてはメディアで取りざたされていますから。たとえば、FGMが行われている地域では、女は病院で出産するのを恐れ、そのために妊産婦死亡率が高まっています。それなのに法律で禁止されていない。女は切除をしたがために白い目で見られます。切除をしたのだということを、人に知られたくないのです。切除は伝統的には良いとされますが、良いとされるのは夫婦間でだけ。医療関係者に見られたり、診察を受けたりということになると違います。だから彼女らは、病院を恐れるのです。ですから出版しても、社会からそれほど反対は受けないと思います。私たちは、政府にFGM禁止法を作るよう働きかけている団体に加わることになります。私たちの仕事は、他にはない語られるべき物語を探し、世界がそれを耳にし、政策を決定する者が女の声を聞き入れるようにすることです。

#### ・中年の女のセクシュアリティ

大池:それでは最後の質問です。ウガンダに来てから、私はウガンダの作品を何冊か読んでいたのですが、中年の女のセクシュアリティについてこんな風に見えるんだなあと感じ入っています。『ヴェラのつづやき』や『公的な妻』や『あなたがいない』、さらに今、『黙って耐える』を読んでいるところですが、中年の女、なかには専業主婦も含めて、彼女らのセクシュアリティについてここまで鮮やかかつオープンに書けることに驚きます。(vi)このことについてどう思いますか。ウガンダの女性作家にとっては簡単なことなのでしょうか。

ヒルダ:簡単ではないと思います。セクシュアリティのようなことについて生々しく描写するには、多くのエンパワーメントが必要だと思います。そうですね、でも『公的な妻』などはセクシュアリティについて語りますが、生々しくはありません。ですからウガンダの市場でも評判はいいですし、国際的にみてもそうです。最初の1ヶ月で1刷が売り切れしました。でも他のものは…『黙って耐える』だって、それほど生々しくはありません。『ヴェラのつづやき』は生々しいですね。ああいう風を書くには、エンパワーメントが必要です。よくあることではありません。あの種のものとしては初めてのものです。よくあることとはまったく言えません。私ならああいった本は書けません。別のレベルでのエンパワーメントと言えるでしょうね。

今後あの類のものがもっと出るかどうかは、うーん、わかりませんね。あれが出版されてこの方…そうですね、もっと出るかもしれません。『ヴェラのつづやき』の後、『公的な妻』が出て、最近「ジャンブラの木」が出ました。(vii)これは2人の少女の性愛の物語です。ですから、そういう性質のものがもっと出てくるでしょうね。

大池: HIV／エイズにかんする開示が進むことで、国全体としてオープンになっていると思いますか。

ヒルダ: そう思いますね。人々はよりオープンになっています。HIV／エイズにかんする政府の政策も、その後押しをしています。今日、エイズとの闘いにかかわる政府とNGOは、開示を促す活動にさらにお金をつぎ込んでいます。そうすれば、人々はいつそう配慮するようになり、白眼視

スティグマ

への取り組みはより効果を発揮します。

大池: 『ヴェラをつぶやき』は出版時に議論を呼びましたか。

ヒルダ: さいわい、作品はフェムライトのものではありませんでしたから、議論に答えずに済みましたが、そう、相当な議論を呼びました。居間で読む本ではありませんね。若い娘や息子に読まれてしまうと困りますから。大人向けの本だと私は思います。

そうそう『赤唐辛子』(Red Pepper)という新聞[大衆紙]をご存知ですか。新聞には『モニター』(Monitor)や『ニュー・ヴィジョン』(New Vision)[という高級紙]があって、一方で『赤唐辛子』がある。『赤唐辛子』はすごく生々しいです。国中の性のスキャンダルを、有名人の名前を挙げて語るわけです。そう、みんな『赤唐辛子』を読みたいんだけど、読むときは『モニター』や『ニュー・ヴィジョン』の内側に入れて隠して読むんです。『ニュー・ヴィジョン』を読んでいるように傍目には見えながら、実際読んでいるのは『赤唐辛子』なわけです。『ヴェラをつぶやき』は、そんな感じの読まれ方をしたのだと思います。読むんだけど、読んでいるとは人に知られたくない。でも私は、彼女はとてもエンパワーされた作家だとは思いますがよ。

大池: あの作家はすごくスタイルを変えますよね。私はもともと彼女のことを、『待つ』を書いた静謐な感じの作家として知っていました。『待つ』は戦争についての小説ですが、書き方がとても穏やかですよ。そしてそのあと、『もはや秘密でない』を読みました。(viii)前半は『待つ』と近いですが、後半はクライム・ノベルで、ロマンスの要素もある。そのあとに『ヴェラをつぶやき』を読んで、彼女はとても才能があって、チャレンジ精神旺盛だと思いました。

ヒルダ: 賛成です。彼女はとても才能があります。彼女の第1作がとてもいいと思います。もっと静かで——もっと率直です。もちろん後の作品の方が洗練されてはいますが、『長女』は村の娘を描いたシンプルで素敵な物語です。(ix)同じ作家がこれを全部書いたことに驚くでしょう。

大池: とても読んでみたくなりました。今後どうか、フェムライトですばらしい才能を育ててください。

- i Bananuka Jocelyn Ekochu, *Shock Waves Across the Ocean* (Kampala: Femrite, 2004); Violet Barungi, *Cassandra* (Kampala: Femrite, 1999); Ayeta Anne Wangusa, *Memoirs of a Mother* (Kampala: Femrite, 1998); Doreen Baingana, *Tropical Fish* (Amherst: U of Massachusetts P, 2005); Goretta Kyomuhendo, *Waiting* (New York: Feminist, 2007); Ama Ata Aidoo, ed., *African Love Stories* (Oxfordshire: Ayebia, 2006).
- ii 挙げられている活動以外にも、雑誌出版、作家による学校訪問、テレビやラジオの文学番組制作、世界的な作家を招いての文学週間開催などを行っている。詳しくはViolet Barungi, ed., *In Their Own Words: The First Ten Years of FEMRITE* (Kampala: FEMRITE, 2006)およびSusan Arndt and Katrin Berndt, ed., *Words and Worlds: African Writing, Theatre, and Society* (Trenton: Africa World, 2007)収録の会員による報告Sudan Kiguli, “FEMRITE and the Woman Writer’s Position in Uganda,” 169-83; Goretta Kyomuhendo, “To Be an African Woman Writer,” 185-92を参照。
- iii 数名が自作の短編小説、長編の抜粋、詩、論説などを匿名で持参し、20名程度の出席者が批評する。フェムライトの会員は女だけだが、このクラブは男女を受け入れている。
- iv Jackie Christie, ed., *Today You Will Understand: Women of Northern Uganda Speak Out*, audioCD and booklet (Kampala: OCHA, IRIN, and Femrite, 2008); Susan Kiguli and Violet Barungi, ed., *I Dare to Say: Five Testimonies by Ugandan Women Living Positively with HIV/AIDS* (Kampala: Femrite, 2007)。インタビューの後半でも触れられるが、紛争やHIVといったテーマを設け、それを経験した村の女に話を聞き、フェムライトの会員が再話するプロジェクト。
- v Ayeta Anne Wangusa and Violet Barungi, ed., *Tears of Hope: A Collection of Short Stories by Ugandan Rural Women* (Kampala: Femrite, 2003).
- vi Goretta Kyomuhendo, *Whispers from Vera* (Kampala: Monitor, 2002); Mary Karoro Okurut, *The Official Wife* (Kampala: Fountain, 2003); Noeline Kaleeba and Sunanda Ray, *We Miss You All*, 1991, 2<sup>nd</sup> ed. (Harare: SAfAIDS, 2002); Jane Kaberuka, *Silent Patience* (Kampala: Femrite, 1999).
- vii Monica Arac de Nyeko, “Jumbula Tree,” *African Love Stories*, 164-77.
- viii Goretta Kyomuhendo, *Secret No More* (Kampala: Femrite, 1999).
- ix Goretta Kyomuhendo, *The First Daughter* (Kampala: Fountain, 1996).

(広島大学准教授)

## アメリカの新大統領オバマの「CHANGE」

須田 稔

08年11月4日夜の大統領就任受諾演説も、アメリカ史に残る名演説かもしれない。草稿はあったのかもしれないが、卓上に視線をやることもなく、聴衆の拍手や歓声に間合いをとりながら淀みなく語るのも感嘆するが、語彙も修辞も構成も、もちろん内容も、その雄弁は聴き手を感動させるだけの迫力があつた。亡きキング牧師を想起させた。

彼の選挙キャンペーンのスローガンは「CHANGE」であつた。“Change we can believe in.” “Change we need.” “Change we hope for.”などであつた。支持者達のレスポンスは、“Yes, we can.”

シカゴでの受諾演説で、“change has come to Amerca.”あるいは “This victory alone is not the change we seek. It is only the chance for us to make that change” そして、“That’s the true genius of America; that America can change.”さらに、“she (Ann Nixon Cooperという106歳の黒人女性) knows how America can change.”

このCHANGEは、two wars (アフガニスタンとイラクでの戦争か)、a planet in peril (地球温暖化、エネルギー資源、食料、医療、教育、貧困、エイズなどの危機的状況を指すのか)、the worst financial crisis in a century (世紀最悪の金融危機)などの課題に挑戦して解決すること、アメリカと世界の窮状を「変えること」なのだ。

「この試練の道は、遙か先までつづき、登る崖は険しく、一年では、いや一期かけても目標に達しない。が、きっと到達してみせるという希望で今夜ほど胸一杯になったことはない」と語るオバマは、リンカンのことば「人民の、人民による、人民のための統治」を引用する。「“We Shall Overcome” を国の人民に説教した人」という表現でキング牧師を想起させる。

それでも、オバマの「CHANGE」は日本語では「変える」であつて、「変革する」ではない。『毎日』ばかりか『赤旗』までが、「変化」と「変革」の両語併記なのだ。「変革」は『広辞苑』には「社会・制度などを変えあらためる」、『日本語辞典』には「社会的・政治的に変え改める」、『字通』は「根本より改める」だ。「変化」の類語に「変改」「改変」「変更」「変動」「改革」「転換」「刷新」「革新」「革命」などがある。「CHANGE」のほかにも「REFORM」「REVOLUTION」「SHIFT」「TRANSFORM」あるいは「INNOVATION」。「変革する」に近い英語は「TRANSFORM」であろうか。

キング牧師の演説文を読み返す。

1963年の“I Have a Dream” に、“knowing that somehow this situation can and will be changed” “one day even the state of Mississippi, a state sweltering with the heat of oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.”



“With this faith we will be able to transform the jangling discords of our nation into a beautiful symphony of brotherhood.”

67年ロサンゼルスでの“The Casualties of the War in Vietnam”に、“It challenges the imagination to contemplate what lives we could transform if we were to cease killing.” “Somehow we must transform the dynamics of the world power struggle from the negative nuclear arms race which no one can win to a positive contest to harness man’s creative genius for the purpose of making peace and prosperity a reality for all of the nations of the world. In short, we must shift the arms race into a ‘peace race.’” “There is an element of urgency in our re-directing American powers.” “If we decide to become a moral power we will be able to transform the jangling discords of this world into a beautiful symphony of brotherhood. If we make the wise decision we will be able to transform our pending cosmic elegy into a creative psalm of peace.”がある。

67年4月4日のニューヨークのリヴァーサイド教会で「ヴェトナムを憂慮する聖職者と平信徒の会」に向けてなした演説“Beyond Vietnam”は、ノーベル平和賞を受賞したマーティン・ルーサー・キング・ジュニアにふさわしく、反戦運動には関与せず専ら公民権運動に没頭せよという、マスメディアはもちろん公民権運動の陣営さえが浴びせた非難に耐えた2年以上の歳月を経て、凜然と詳述した「良心宣言」であった。

アフガニスタンとイラクへの戦争と占領が泥沼の中のあがきのように7年もの間続いているとき、キングのこの演説が説く真理と正義は燦然と希望の光芒を放つのだが、「私には夢がある」だけが称揚されているのは、何とも悔しい。

「沈黙が裏切りになるときがある」。そうなのだ、不戦を誓う憲法をもちながら、アメリカの中東での無法な暴力行使に加担することを「国際的責務」だなどと「ならず者」よろしくの妄言で戦争準備体制を強化している政府と議会に、人間らしい知性と感性と想像力を磨いて抗議の声を突きつけなければならない今なのだ。

“my conviction that social change comes most significantly through nonviolent action.”

“They asked if our own nation wasn’t using massive doses of violence to solve its problems, to bring about the changes it wanted.”

“but the long line of military dictators seemed to offer no real change,”

“The only change came from America as we increased our troop commitment in support of governments which were singularly corrupt, inept, and without popular support.”

“land reform”

“The image of America will never again be the image of revolution, freedom, and democracy, but the image of violence and militarism.”

“unless there is a significant and profound change in American life and policy.”

“our nation was on the wrong side of a world revolution.”

“the late John F. Kennedy...said, “Those who make peaceful revolution impossible will make violent revolution inevitable.””

“I am convinced that if we are to get on the right side of the world revolution, we, as a nation, must undergo a radical revolution of values. We must rapidly begin the shift from a thing-oriented society to a person-oriented society.”

“A true revolution of values will soon cause us to question...”

“One day we must come to see that the whole Jericho Road must be transformed.” このあとrevolution of valuesが4度使われる。ただし、revolution に形容詞trueが2回、positive、genuineが各1回。 “These are revolutionary times... We in the West must support these revolutions.” 「革命的精神」が3回。 “the Western nations that initiated so much of the revolutionary spirit of the modern world have now become the arch antirevolutionaries. This has driven many to feel that only Marxism has a revolutionary spirit... Our only hope today lies in our ability to recapture the revolutionary spirit and go out into a sometimes hostile world declaring eternal hostility to poverty, racism, and militarism.”

そして、結語は。 “And if we will only make the right choice, we will be able to transform this pending cosmic elegy into a creative psalm of peace. If we’ll make the right choice, we will be able to transform the jangling discords of our world into a beautiful symphony of brotherhood. If we will but make the right choice, we will be able to speed up the day, all over America and all over the world, when justice will roll down like waters, and righteousness like a mighty stream.”

キングとオバマの違い、これは牧師と政治家の責務の違いによるだけだろうか。

(立命館大学名誉教授)

## アメリカ大統領選挙：オバマ勝利演説

2008年11月4日のアメリカ大統領選挙では、1961年生まれの民主党のバラク・オバマ上院議員が米国史上初の「黒人大統領」として当選しました。以下、選挙当日深夜のシカゴ

における、公民権運動などにも言及したオバマ勝利演説を掲載します。(米国政府公式サイトより引用。)黒人研究の会でも関連企画を考えています。詳細は後日。

Barack Obama's Victory Speech: President-elect addresses supporters in Illinois

Chicago, Illinois

November 4, 2008

Hello, Chicago.

If there is anyone out there who still doubts that America is a place where all things are possible, who still wonders if the dream of our founders is alive in our time, who still questions the power of our democracy, tonight is your answer.

It's the answer told by lines that stretched around schools and churches in numbers this nation has never seen, by people who waited three hours and four hours, many for the first time in their lives, because they believed that this time must be different, that their voices could be that difference.

It's the answer spoken by young and old, rich and poor, Democrat and Republican, black, white, Hispanic, Asian, Native American, gay, straight, disabled and not disabled. Americans who sent a message to the world that we have never been just a collection of individuals or a collection of red states and blue states.

We are, and always will be, the United States of America.

It's the answer that led those who've been told for so long by so many to be cynical and fearful and doubtful about what we can achieve to put their hands on the arc of history and bend it once more toward the hope of a better day.

It's been a long time coming, but tonight, because of what we did on this date, in this election, at this defining moment, change has come to America.

A little bit earlier this evening, I received an extraordinarily gracious call from Sen. McCain.

Sen. McCain fought long and hard in this campaign. And he's fought even longer and harder for the country that he loves. He has endured sacrifices for America that most of us cannot begin to imagine. We are better off for the service rendered by this brave and selfless leader.

I congratulate him; I congratulate Gov. Palin for all that they've achieved. And I look forward to working with them to renew this nation's promise in the months ahead.

I want to thank my partner in this journey, a man who campaigned from his heart, and spoke for the men and women he grew up with on the streets of

Scranton and rode with on the train home to Delaware, the vice president-elect of the United States, Joe Biden.

And I would not be standing here tonight without the unyielding support of my best friend for the last 16 years, the rock of our family, the love of my life, the nation's next first lady, Michelle Obama.

Sasha and Malia, I love you both more than you can imagine. And you have earned the new puppy that's coming with us to the new White House.

And while she's no longer with us, I know my grandmother's watching, along with the family that made me who I am. I miss them tonight. I know that my debt to them is beyond measure.

To my sister Maya, my sister Alma, all my other brothers and sisters, thank you so much for all the support that you've given me. I am grateful to them.

And to my campaign manager, David Plouffe, the unsung hero of this campaign, who built the best — the best political campaign, I think, in the history of the United States of America.

To my chief strategist David Axelrod who's been a partner with me every step of the way.

To the best campaign team ever assembled in the history of politics. You made this happen, and I am forever grateful for what you've sacrificed to get it done. But above all, I will never forget who this victory truly belongs to. It belongs to you. It belongs to you.

I was never the likeliest candidate for this office. We didn't start with much money or many endorsements. Our campaign was not hatched in the halls of Washington. It began in the backyards of Des Moines and the living rooms of Concord and the front porches of Charleston. It was built by working men and women who dug into what little savings they had to give \$5 and \$10 and \$20 to the cause.

It grew strength from the young people who rejected the myth of their generation's apathy, who left their homes and their families for jobs that offered little pay and less sleep.

It drew strength from the not-so-young people who braved the bitter cold and scorching heat to knock on doors of perfect strangers, and from the millions of Americans who volunteered and organized and proved that more than two centuries later a government of the people, by the people, and for the people has not perished from the Earth.

This is your victory.

And I know you didn't do this just to win an election. And I know you didn't do it for me.

You did it because you understand the enormity of the task that lies ahead. For even as we celebrate tonight, we know the challenges that tomorrow will bring are the greatest of our lifetime — two wars, a planet in peril, the worst financial crisis in a century.

Even as we stand here tonight, we know there are brave Americans waking up in the deserts of Iraq and the mountains of Afghanistan to risk their lives for us. There are mothers and fathers who will lie awake after the children fall asleep and wonder how they'll make the mortgage or pay their doctors' bills or save enough for their child's college education.

There's new energy to harness, new jobs to be created, new schools to build, and threats to meet, alliances to repair.

The road ahead will be long. Our climb will be steep. We may not get there in one year or even in one term. But, America, I have never been more hopeful than I am tonight that we will get there.

I promise you, we as a people will get there.

There will be setbacks and false starts. There are many who won't agree with every decision or policy I make as president. And we know the government can't solve every problem.

But I will always be honest with you about the challenges we face. I will listen to you, especially when we disagree. And, above all, I will ask you to join in the work of remaking this nation, the only way it's been done in America for 221 years — block by block, brick by brick, calloused hand by calloused hand.

What began 21 months ago in the depths of winter cannot end on this autumn night.

This victory alone is not the change we seek. It is only the chance for us to make that change. And that cannot happen if we go back to the way things were.

It can't happen without you, without a new spirit of service, a new spirit of sacrifice.

So let us summon a new spirit of patriotism, of responsibility, where each of us resolves to pitch in and work harder and look after not only ourselves but each other.

Let us remember that, if this financial crisis taught us anything, it's that we cannot have a thriving Wall Street while Main Street suffers.

In this country, we rise or fall as one nation, as one people. Let's resist the temptation to fall back on the same partisanship and pettiness and immaturity that has poisoned our politics for so long.

Let's remember that it was a man from this state who first carried the banner of the Republican Party to the White House, a party founded on the values of self-reliance and individual liberty and national unity.

Those are values that we all share. And while the Democratic Party has won a great victory tonight, we do so with a measure of humility and determination to heal the divides that have held back our progress.

As Lincoln said to a nation far more divided than ours, we are not enemies but friends. Though passion may have strained, it must not break our bonds of affection.

And to those Americans whose support I have yet to earn, I may not have won your vote tonight, but I hear your voices. I need your help. And I will be your president, too.

And to all those watching tonight from beyond our shores, from parliaments and palaces, to those who are huddled around radios in the forgotten corners of the world: Our stories are singular, but our destiny is shared, and a new dawn of American leadership is at hand.

To those — to those who would tear the world down: We will defeat you. To those who seek peace and security: We support you. And to all those who have wondered if America's beacon still burns as bright: Tonight we proved once more that the true strength of our nation comes not from the might of our arms or the scale of our wealth, but from the enduring power of our ideals: democracy, liberty, opportunity and unyielding hope.

That's the true genius of America: that America can change. Our union can be perfected. What we've already achieved gives us hope for what we can and must achieve tomorrow.

This election had many firsts and many stories that will be told for generations. But one that's on my mind tonight's about a woman who cast her ballot in Atlanta. She's a lot like the millions of others who stood in line to make their voice heard in this election except for one thing: Ann Nixon Cooper is 106 years old.

She was born just a generation past slavery; a time when there were no cars on the road or planes in the sky; when someone like her couldn't vote for two reasons — because she was a woman and because of the color of her skin.

And tonight, I think about all that she's seen throughout her century in America — the heartache and the hope; the struggle and the progress; the times we were told that we can't, and the people who pressed on with that American creed: Yes we can.

At a time when women's voices were silenced and their hopes dismissed, she lived to see them stand up and speak out and reach for the ballot. Yes we can.

When there was despair in the dust bowl and depression across the land, she saw a nation conquer fear itself with a New Deal, new jobs, a new sense of common purpose. Yes we can.

When the bombs fell on our harbor and tyranny threatened the world, she was there to witness a generation rise to greatness and a democracy was saved. Yes we can.

She was there for the buses in Montgomery, the hoses in Birmingham, a bridge in Selma, and a preacher from Atlanta who told a people that "We Shall Overcome." Yes we can.

A man touched down on the moon, a wall came down in Berlin, a world was connected by our own science and imagination.

And this year, in this election, she touched her finger to a screen, and cast her vote, because after 106 years in America, through the best of times and the darkest of hours, she knows how America can change.

Yes we can.

America, we have come so far. We have seen so much. But there is so much more to do. So tonight, let us ask ourselves — if our children should live to see the next century; if my daughters should be so lucky to live as long as Ann Nixon Cooper, what change will they see? What progress will we have made?

This is our chance to answer that call. This is our moment.

This is our time, to put our people back to work and open doors of opportunity for our kids; to restore prosperity and promote the cause of peace; to reclaim the American dream and reaffirm that fundamental truth, that, out of many, we are one; that while we breathe, we hope. And where we are met with cynicism and doubts and those who tell us that we can't, we will respond with that timeless creed that sums up the spirit of a people: Yes, we can.

Thank you. God bless you. And may God bless the United States of America.

## 海外からの情報

2008年はアフリカ現代文学の「古典」あるいは「出発点」とされるナイジェリア出身 Chinua Achebe による Things Fall Apart (1958) [邦訳: チヌア・アチェベ、古川博巳訳『崩れゆく絆』、門土社、1977年] が刊行されて50周年となる。本年初めから各地で関連行事が行われ、以下の記事をはじめメディアなどでも取り上げられている。(CNN.com : 2008年2月19日付配信)

### Things Fall Apart Still Teaching Lessons 50 Years Later

ANNANDALE-ON-HUDSON, New York (AP) -- At age 77, author Chinua Achebe is living in grace and in exile, housed in a cottage built just for him on the campus of Bard College, lonely for his native Nigeria and the people for whom his stories have been written.

"I feel that's where I should be," he says of Nigeria, where he has not lived since the 1980s. "Having that relationship active, and working, is important for the health of my stories."

A perennial candidate for the Nobel Prize and winner last year of the Man Booker International Prize for lifetime achievement in fiction, Achebe arrived at Bard in 1990, not long after an auto accident in Nigeria left him paralyzed from the waist down.

He is a longtime professor of languages and literature, and speaks warmly of the students who seem to know his work well, but Achebe has not completed a novel in more than 20 years, and has no desire to set any fiction in this country, saying it would not be "the most important thing for me to do, because there are so many people doing it." While he is currently working on two or three projects, nothing is close to completion and he acknowledges that "a novel is certainly overdue."

"This is a period that I found myself going to live abroad, and with the problem of paraplegia, which is not very comfortable. So just sitting down, writing a novel, has a huge physical side to it, which is not helped by this," he says.

But, he adds, firmly, "I must not deal with excuses."



Still hoping to return to Nigeria, even though he has often dissented from the government, Achebe can look forward to renewed praise in the United States and beyond thanks to the 50th anniversary of his most famous book, "Things Fall Apart," the rare modern novel to make history, and not because of any prize.

Achebe's story of a Nigerian tribesman's downfall before the advance of colonial power stands as the acknowledged birth of indigenous African fiction, an early and enduring literary portrait of a culture that had been seen only through the patrician stare of Western eyes.

An instant event in Nigeria but reviewed mildly in the United States when first published (the initial New York Times review ran less than 500 words), "Things Fall Apart" has been translated into more than 30 languages and sales top 10 million copies. No book by an African has been so deeply discussed or so widely influential.

"There were books by Africans before 'Things Fall Apart,' but this is the one everyone goes back to," says Kwame Anthony Appiah, a leading African scholar who wrote the introduction to the Everyman's Library edition of "Things Fall Apart."

"It would be impossible to say how 'Things Fall Apart' influenced African writing. It would be like asking how Shakespeare influenced English writers or Pushkin influenced Russians. Achebe didn't only play the game, he invented it."

Interviewed recently at his home on a gray, snowy afternoon, Achebe sits at a small table in his dining room, the smell of fried fish tempting from the kitchen, a woman's low humming (Achebe's sister-in-law) soothing from another room. In front of him, like a conversation on hold, stands a glass of juice with a napkin draped over it.

The white-haired Achebe is a king in print, but he lives and dresses modestly, wearing a warm, white sweater and dark slacks. The art is in his speech: words spoken softly and carefully, with a sense of poetry and of oracle, a voice that makes you believe it could raise or resolve the most difficult mystery.

A native of Ogidi, Nigeria, Achebe was a gifted student whose father worked in the local missionary. After graduating from the University College of Ibadan, in 1953, Achebe was a radio producer at the Nigerian Broadcasting Corporation, then moved to London and worked at the British Broadcasting Corporation.

He was writing stories in college and was in London, in the mid-1950s, when he began "Things Fall Apart," calling it an act of "atonement" for what he says was the abandonment of traditional culture.

The novel's opening sentence is as simple, declarative and revolutionary as a line out of Hemingway: "Okonkwo was well known throughout the nine villages and even beyond." Africans, Achebe had announced, had their own history, their own celebrities and reputations.

"I read 'Things Fall Apart' when I was a freshman in college. I was working full-time and taking classes and so busy it was scary and reading the novel fast and without much reflection I only thought it was OK," recalls Dominican-American author Junot Diaz, whose books include the acclaimed novel "The Brief Wondrous Life of Oscar Wao."

"It was when I read it again junior year, after my mind had matured some and I had read a number of other 'African' writers, that I understood the stupendous achievement of 'Things Fall Apart' and the sort of conversation it was having with other 'African' and European novels."

The story is set around the turn of the 20th century and Okonkwo is a character as old as storytelling itself -- a man who embodies a culture in decline, the virtues and the limitations. He is so wedded to the codes of battle and confrontation, the feats that led to his greatness, that he is tragically helpless before the modern power and persuasion of the missionaries.

In mockery of all the Western books about Africa, Achebe ends with a colonial official observing Okonkwo's fate and imagining the book he will write: "The Pacification of the Primitive Tribes of the Lower Niger." Achebe's novel was the opening of a decades-long argument on his country's behalf, in fiction such as "A Man of the People" and "No Longer at Ease," and in essays dissecting the canon of the West.

He has attacked such popular works about Africa as Joyce Cary's "Mister Johnson" as ignorant and self-satisfied. He was especially offended by Joseph Conrad's "The Heart of Darkness," once declaring it a "novel which ... depersonalizes a portion of the human race," reducing a great culture to a handful of threats and grunts.

"Now, I grew up among very eloquent elders. In the village, or even in the church, which my father made sure we attended, there were eloquent speakers. So if you

reduce that eloquence which I encountered to eight words ... it's going to be very different," Achebe says during his interview.

"You know that it's going to be a battle to turn it around, to say to people, 'That's not the way my people respond in this situation, by unintelligible grunts, and so on; they would speak.' And it is that speech that I knew I wanted to be written down."

Achebe writes and thinks to contrapuntal melodies of language and culture. As a child, he was schooled in the stories of his relatives and in the English literature of the colonialists. In his mind Ibo legends and the prose of Dickens still meet, the "two types of music" that sometimes clash and sometimes converse.

"What I found myself doing more and more, whenever I encountered a statement I thought was interesting or profound in one language, I would try to put it into the other language to see if it would work," he says.

His novel is a triumph of contradictions: a memorial for a tribal culture by an author whose father was a convert to Christianity; a history-making book about a man whom history left behind; a document of a preliterate people written in the finest contemporary prose.

"There is a proverb that the sword you have is the one you greet your peers with," Achebe explains. "Is it (a novel) the best weapon? Of course, not. If that's what you can do, then offer what you have. You know that there may be better things to offer.... It's what I can manage. It's not adequate, but that is what I have, so please accept."

Appiah says that language is part of the genius of "Things Fall Apart." He notes that earlier novels by Africans, including Amos Tutuola's "The Palm-Wine Drinkard," were written in a kind of Africanized prose that seemed to mimic the way a Nigerian would speak English.

"What Achebe did was answer a question no else had thought of asking," Appiah says. "The problem was: If you're going to write about Africa, how do you write about all the different people and cultures and do it through the language of the novel? He solved the problem by drawing on different levels of English, from slang to the most precise 20th-century realism. Once he had showed you how to solve the problem, it all seemed so obvious."

One of the most celebrated young Nigerian writers, Chimamanda Ngozi Adichie, says that she read "Things Fall Apart" when she was around 8 and has periodically reread it. "I find that I liked the same things each time -- the

familiarity with it. I hadn't realized that people like me could be in a book," she explains.

Countless others have cited Achebe, from Nobel laureate Toni Morrison, who once called "Things Fall Apart," a "major education" for me, to Ha Jin, a Chinese-American novelist. Achebe himself recalls some letters he received about a decade ago from students at a women's college in South Korea.

"It surprised me also in the sense I realized that people in different places would be reading it from totally different positions, positions I didn't think they knew about," he says.

"They (the students) said to me, many of them, that this was like their story. And I said to myself, 'Korea? I don't know Korea. And I don't know what their story is.' They explained that they were also colonized, by the Japanese. That simple fact of colonization was enough to make someone so far away come to terms quickly with this story."

## 入 会 者

平沼 公子(ひらぬま きみこ) 氏

現在、同志社大学アメリカ研究科博士後期課程に在籍中です。米国ラトガーズ大学大学院で修士号を取得し、昨年帰国しました。修士時代には、Richard Wright, Ralph Ellison, James Baldwin, Ann Petryらを中心に都市と共同体をテーマに研究して参りましたが、博士後期課程に入り、Gayl Jones、Octavia Butlerといった現代アメリカ黒人女性作家達に視野を広げ、歴史・時空・身体・語り、といったことをテーマに研究しています。よろしくお願いいたします。

宮本 敬子(みやもと けいこ) 氏

アメリカ女性作家とジェンダー・フェミニズム思想を中心に研究しています。博士論文では、Toni MorrisonのLove Trilogyにおける人種、歴史、共同体について、精神分析フェミニズムの観点から分析しました。最近では、アメリカ文学・映画にお

ける人種、ジェンダー、階級表象なども研究しています。アフリカ系アメリカ文化や歴史についても広く学びたいと願い、入会させていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

ファノン・チェ・ウィルキンズ 氏

所属：同志社大学准教授

(順不同)

## 会 員 消 息

古川 博巳 氏

11月下旬、日韓共催の Peace & Green Boat に乗船し、釜山上陸の際に東亜大学図書館を訪問した。そこでは、同大学に勤務していた釜山在住会員・李秀光(イ・スグァン)氏が1960年代に参画した、韓国における<黒人文学全集>(全5巻、徹文出版社、1965年刊)の現物確認の念願を果しえた。当時、赤松光雄氏と小生は、李氏の要請により所持の関連原書を提供し、韓国語による全集出版に協力した経緯があった。(この件の詳細は、後日に報告予定。)

風呂本惇子 氏、松本 昇 氏

編著『英語文学とフォークロア——歌、祭り、祈り』を南雲堂フェニックスより2008年12月に刊行予定。

松本 昇 氏

ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア著『シグニファイイング・モンキー——アフリカ系アメリカ文学批評理論』(南雲堂フェニックス、2009年1月刊行予定)を監訳。

(順不同)

<編集> 黒人研究の会・編集部

〒603-8143 京都市北区小山上総町  
大谷大学文学部・古川哲史研究室気付

<編集者> 時里祐子

#### 編集後記

とにもかくにも黒人関連のニュースに事欠かない一年でしたが、オバマ氏当選のニュースの熱も冷めやらぬ時期に68号を発行できることをうれしく思います。2000年の連邦下院選挙の際には、「黒人らしくない」と彼を非難した他の黒人候補者に敗退したオバマ氏ですが、今回の大統領当選。アメリカにおける「アフリカン・アメリカン」、ひいては「黒人」の概念の変化とも受け取れます。今後、黒人研究がどのように発展していくのか、会員諸氏のさまざまな論考をお待ちしております。

(時里 祐子)